

～ 「高・清フレンドリー古道」 ～

第 3 卷－Ⅶ部

「横道」と「高・清フレンドリー古道」の使われ方

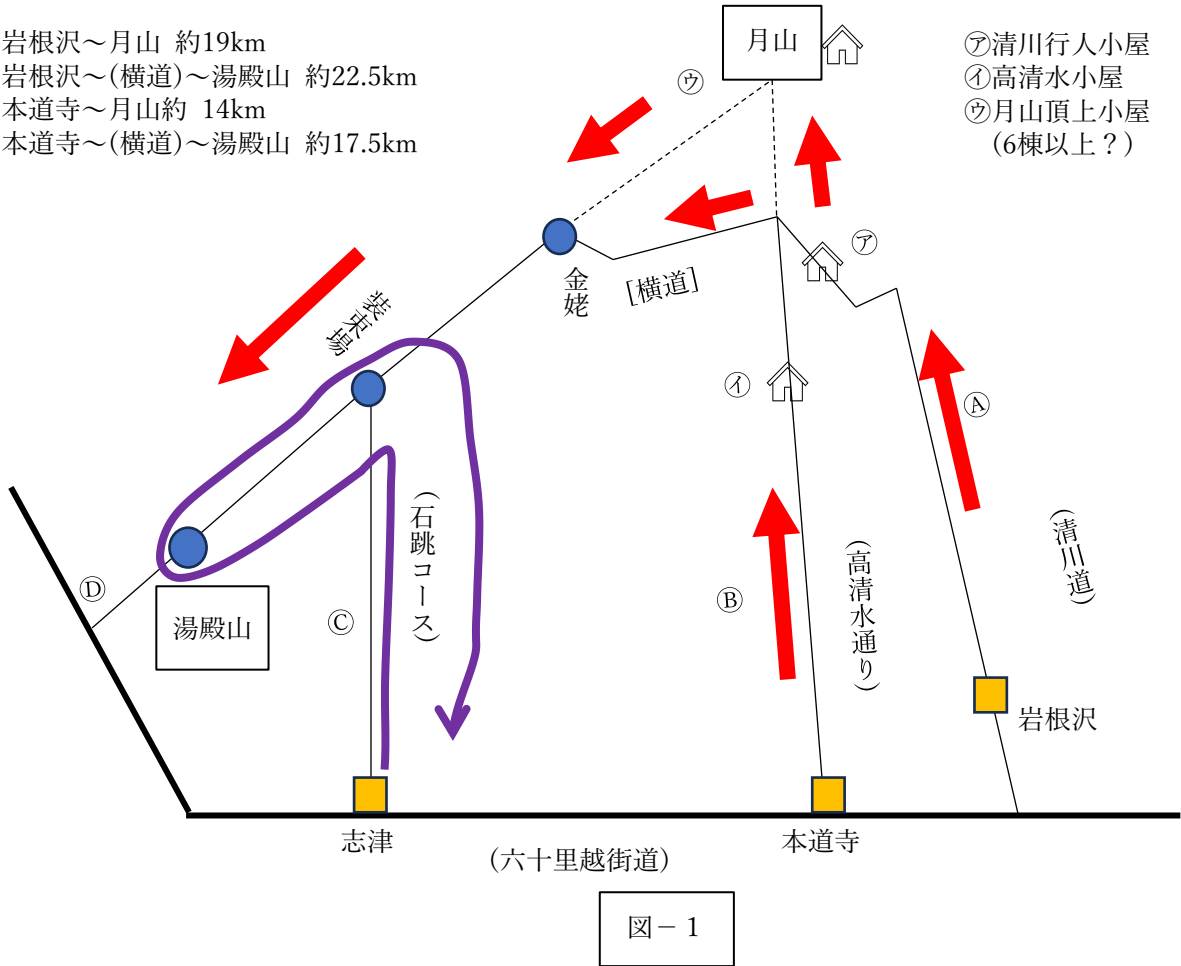
そもそも、標記の道はよく使われたものだろうか、あるいは、ほぼ下り専用に使われたのではないだろうか？ と自問自答しながら考察して見る。この自問自答ならず、一般一部の人にも同様の疑義があるとも云われている。

本エリアに入った参詣ルートは、大きくは三つあった。断面性を加味したイメージは図－1のとおり。

一つ目は岩根沢口の④「清川道」に入れば、月山参拝を終えてその後に湯殿山向けに、あるいは途中から分岐し「横道」経由の湯殿山向けであった。湯殿山参拝後はそのほとんどは同じ道を引き返したであろうが、真相は不明なる。

二つ目の本道寺口は二つの選択肢があって、⑤「高清水通り」に入り、岩根沢口と同様の入り方があった。

⑥片や、志津に向かい石跳沢コースに入り装束場から湯殿山向けであった。



別記「月山・湯殿山 追分」碑の必要性や存置意義は「横道」の存在に依拠する、横道と一体である、「高・清」両古道は、横道と一体で存在意義がある。横道の開削動機は以下に鑑みて湯殿山向け参詣者誘導の道であり、いわゆる今様の「タケノコ道」ではない。タケノコ取りにも使っただろうが、それは副産物である。

昔の使われ方について以下に列举する。

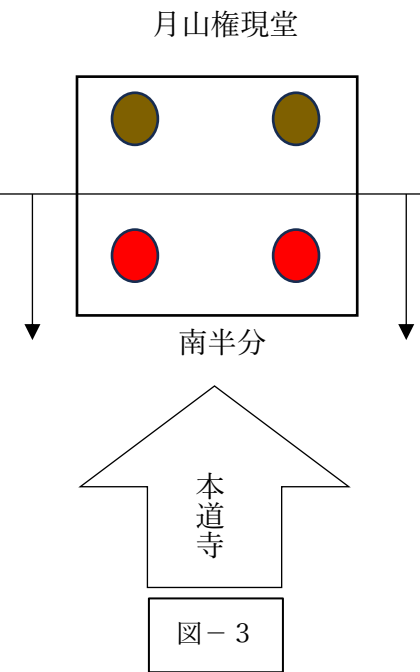
その1；戸川安章著「出羽修験の修行と生活」（佼成出版社）P85に興味深い一節がある。「・・・本道寺からの道者で※1横道を利用したのは関東道者に多い。仙台、福島、岩手の道者で六十里越街道を利用する者は、羽黒派に属する岩根沢の日月寺一山の宿坊に泊まる者が多かったから、本道寺や大井沢には立ち寄らなかった。・・・」（※1）最盛期は、横道が関東道者によって大いに歩かれたということ。戸川安章さんの書きぶりの視点は、本道寺、または、岩根沢から入った行者・道者の動きは湯殿山を目指した動きであって、逆の、参拝を終わって湯殿山から本道寺、または、岩根沢を目指した帰りの動きではないだろう。

その2；片山正和著「出羽三山山伏の世界」（新人物往来社）P192～P196に次のような一節がある。「・・・出羽三山の神仏分離は西川須賀雄の英断によって実行された。その方法はかなり強引なものであった。西川は明治七年七月十九日、月山に初めて登っている。西川は月山で一泊し、翌朝七時ごろ、湯殿山に下る。西川は湯殿山に参拝後、また、来た道を引き返す。そして、※2「牛が首」から道を右にとり、岩根沢に下る。出羽三山の登り口は七口あった。その一つに岩根沢口があり、当山派（天台宗）修験道として栄え、やはり神仏混淆寺であった。・・・」（※2）まさに、湯殿山から歩き始め、横道を歩いて、清川行人小屋を経由して岩根沢旧日月寺に行ったのである。

その3；図－2は「貞治七年阿弥陀板碑」と通称されるもので山形市山家町内に立っている、山形県「山形の宝」データベース等を参考にする。南北朝期の北朝年号貞治7年（西暦1368年）の年号が刻まれている板碑。高さ1.3m、上部幅44cm、下部幅42cm、厚さ30cmの柱状である。正面上部に直径37cmの円い二重円線を配し、その中にキリーク（阿弥陀如来）の種子を刻み、その向かって右にサ（観音）、左にサク（勢至）の種子を並べて置く。この場所には昔、一明院という修験寺院（真言宗）があったとされる。百人もの行人が結集し月山登拝した最古の例として貴重である。山形側から見れば、地の利として、寒河江→白岩→西川に入り、岩根沢口・あるいは本道寺口から月山に向かったのだから、当然④・⑤、あるいは⑥のルートであっただろう。



その4；西川町史編集資料第八号（三）にある寛文六年三月九日（西暦1666年）文書によると図－3のとおり、月山山頂に権現堂があって、北側半分は庄内（羽黒）が占有（占領）し、南側半分は、本道寺村の三別当〔本道寺・左藤常陸・布施新左衛門〕の3者で奉仕して来た、社守の任に当たっていたとある。これは、本道寺から登って来た行者を待ち受ける態勢を意味するものであろう。



その5；図－4のとおり義川の版画絵「月山 清川」（文政三・1820年作成）を見ると、清川行人小屋から大勢の道者が行列を成して清川古道を登る状況が描かれている、追分碑（同碑存置年代の是非は不明）に直面し月山を目指した、また、ある時は「横道経由」で湯殿山を目指した—だから追分に「月山・羽黒山－湯殿山・牛首」と刻した—であろう。



その6；そもそも、志津は本道寺の門前集落という扱いではあったが、西川町史編集資料第八号（一）9頁／天和三（1683）年二月文書によれば、「高清水通りからの行者は、月山は元より横道経由で湯殿山に参ったことから、志津経由の客が減ることとなり困る」というので幕府評定所に訴上したとある。また、同文書には「高清水口は古来月山・湯殿山の遍路である」（月山と湯殿山の併記である）と明記されている。

その7；以下の事業は、相応の資金や労力を投じて製造させ、かつ、開眼供養・入魂儀式を行い、神仏を宿したのに見立てて、長い時間をかけて山中に運んだのだ。それらの状況・実態に鑑みては、両山を目指す登り行者に対する鼓舞・激励の意味合いもあったはず、賽銭徴収の意味合いもあったことだろう、この域の信仰の面から言えば、難儀・苦勞してまでも最高の神仏が籠る月山・湯殿山を目指す行為に対応した登拝行動（上り・登り）に適う事象である。

- ・九十六丁（石）は、あくまでも里（下）から山（上）へ向けて安置した。（他所では山から里へ安置する場合もあるが、ここではそうではない。）
- ・姥像等石碑群に、「祖母神」像や「南無三十三観世音菩薩供養（塔）」等の石碑を寄進奉納した。
- ・石船の地に、船首の湯殿山向けを意図した（里の民衆の願い・尊崇の心を乗せた）舟形水受け石造物を寄進奉納した。
- ・「高清水小屋」に開山中の2か月間小屋を掛け、二人が寝泊りして行者接待を成した。
- ・「高清水通り」を道普請・守護するために専属の別当を配置した。
- ・寛永十六（1639）年と天和三（1683）年の古文書（西川町史に記載）によると、奥州藤原秀衡公の奥方が「高清水小屋」跡地まで、自ら足を運び、ここを含む6個所に、1個所当たり6体の塩竈六所明神金仏計36体を寄進・建立した。

まずは、そもそも、月山、あるいは湯殿山参拝の目的を果たした人間の普通の心理に沿って考える必要がある。参拝の目的を果たした生の人間心理は、ただただ里に下りたくなるだけであろう。一心に娑婆を目指して歩く人間心情に即せば、こんな山道に、主として下る人を対象とした信仰の便宜供与のために上記のような時々の大事業を行うはずはないだろう。

その8；御山入りは三山奥の院としての湯殿山参りが最終目的であったからは、行者・道者は月山に立ち寄らないで横道経由で直行したこともあろうし、月山立ち寄りを計画したものの体力的なこと、天候の変化により、回避して横道経由で直行したこともあったろうから重要な複線ルートであったのだ。

その9；昔の旅人は平均的に10kgから20kg程度の荷物を背負い、1日約32～40kmも歩いたとされる。江戸期の※³五街道および※⁴熊野古道全道をスルーハイクした大沼の経験を踏まえると、この両道は、“一般の行者・道者の歩行は無理”と言えるほどの急坂が連続するのか、と言え、両道についての急所は「手盡坂」当りの約1km、横道については牛首下当りの1kmほどであるが、その程度は格別急峻ではない。（※³・⁴）「手盡坂」相当の急峻な場所はそこには必ず複数個所存在していた。藩主や奥方は籠を下りて自ら歩いてまでも急坂の峠を越えたのだ。

その10；横道の残雪有無を考えるに、江戸期の湯殿山開山期は旧暦6月1日（新暦7月下旬）～8月15日（新暦9月下旬）であったが、地形的に西南に面し、大沼が幾度となく通い詰めて覗いたことから、その間はすっかり融雪する、よって昔も、営業期間中はまったく問題なしであったことだろう。

その11；本道寺からの参詣人が湯殿山参りだけが目的ならば、（許されたとして岩根沢道者も）㉔ルート、あるいは、六十里越街道に至る㉕ルートを取って戻れば良いはずであり、㉖㉗ルートを開発する必要はない。仮に、里への戻り専用のために湯殿山側から横道経由を構想した場合、湯殿山→金月光→装束場→金姥まではかなりの登り一辺倒となり、その先は牛首下まで少し下るというものの横道に入れば高清水通り合流点までもかなりきつい登りとなる、このようなルートにおいて本道寺・岩根沢への帰り専用道として開削することの可能性はとても低いと考える。

その12；丸山茂著「神都 岩根澤之面影」（同刊行舎・昭和十五年十二月二十日発行）のP260以降に興味ある記述があるので取り上げる。山形県村山地方からの湯殿山参詣に係る部分で「・・・丑年は湯殿山の縁年と言って弘法大師が湯殿山を開いたという伝説に基づき、参詣者は例年の10倍にも達した。・・・慶応元丑年は湯殿山の縁年であったから、岩根澤口を通して参詣した信者も夥しい数で、百人講、または二三百人講という団体も数多かった。・・・」 ずばり、岩根澤から入って湯殿山に向かったとある。

西川町史編集資料第六号P170からを見ると、湯殿山参拝人に係る明治12年――明治期に入れば国土開発の波と共に志津への道路も整備されたことであろう――の統計として、夏季2か月間で^前本道寺口には9,665人ほど、^後岩根沢口7,095人ほどの参詣者が入ったとある。単純に計算すると1日当り前者は160+^a人ほど、後者は118+^a人ほどになる。例えば、古来の「高清水小屋」があったとして収容人数からはこの道に入った可能性は低い、よって、高清水通りに入らずに志津から㉔石跳コースを利用しただろう、さすれば、帰りは逆を辿るだろう、したがって、高・清フレンドリー古道に立ち入る参詣者は減少するだろうと推測するのは妥当なことである。ただし、明治以降の一時期の㉔コース往復利用を以って、両古道の歴史上の全期間に当てはめることは片手落ちというものである。

なお、天台宗岩根沢口の道者については、真言宗旧本道寺配下（門前）にあった志津回りはなかっただろうから、すれば、烏川行人小屋か、清川行人小屋を利用したであろうが、烏川行人小屋は2棟掛けたとされるものの小屋の収容人数はどうだったのか、 小屋のキャパシティもあるが、現代の私達でさえ、里の岩根沢・本道寺の集落を早朝出立し、月山経由で湯殿山に降りる人は沢山いる、ましてや、いざとなれば、昔の人の健脚からすれば山中の山小屋を利用しなくても周回した可能性大である。

今も昔も、森羅万象の「もの・こと」に栄枯盛衰は付きもの、時代や社会趨勢に応じて参詣者の入り方、山道の使われ方の変動は自然原理である。例えば、あるコースの旅日記の存在を以って他の道の使用頻度評価に敷衍化することは合理的ではない。江戸時代、今の月山頂上小屋周囲には6・7棟ほどの小屋があった、羽黒口行者はもちろんだが、お助け小屋としての機能もあったということからは、岩根沢口道者や本道寺口行者も、長い歴史の中で見れば泊れたはずということを聞き及んでいる。

以上を総合的に見れば、「高清水通り」は、月山・湯殿山向けの参詣道として使われた、むしろ、主は上り（登り）に使われたと理解するのが社会通念上の解釈、自然な見方ではなかろうか。長い時間軸の中で一部・一時期の動静を以って、全体に及ぼし歴史上の全てかのように規定化・評価する見方は、既成概念に固執し片寄った見方になるのではないか。

(end)